

都道府県別賞一等

自分のこれからのしも、を考える

三重県 名張市立北中学校 一学年

山口 虎琉

ぼくが生命保険という存在を知ったのは、六歳の時です。そのきっかけは、ぼくの祖父が仕事で歩くのが痛いと言いだし、母が病院に連れて行きました。数時間後母が帰って来てバタバタと服をまとめていたのでどうしたのかなと思っていたら、祖父は脳梗塞。三日間の検査入院となりました。小さいながらぼくは、ニュースなどでその病名を聞いたことがあったので「おじいちゃん、死んでしまうのかな。」と心配になりました。でも早期発見だったので祖父は手術をすることもなく、三日で退院しすぐに仕事復帰をしていました。退院してすぐ家に来たのは生命保険の方でした。入院給付金の話や三大疾病一時金の話など、その時のぼくには全く理解はできませんでしたが、「お金がこんなにもらえるのか、もう少し入院しても良かったわ。」と笑いながら言う祖父の言葉はよく覚えていて、病気になったらお金がもらえる生命保険はすごいなとその時感じました。

その後すっかり元気になった祖父は通院することもなく三年が経ちました。その時また家に生命保険の方が来て「保険更新の時期が来たので見直しをしましょう。」と話を始めました。ぼくも小学三年生になっていたので話の理解は少しはできました。今までの保障のままにすると保険料が高くなると聞き祖父と祖母は頭を悩まし、三年前検査入院してからはすっかり元気だった祖父は、三大疾病保障もいららないと言い入院の保障を少しだけ残した保険に見直しました。「また、病気になったらどうするの。」とぼくも声をかけたのですが「大丈夫。こんなに元気だしまだ六十歳になったばかりだからまだまだ働くよ。」と祖父はニコニコしていたので安心しました。生命保険のことを全部分かってはいなかったけれど元気そうだし大丈夫かなと思いいままでいました。

ところがその数カ月後、祖父が救急車で運ばれ緊急手術。病名は「脳出血」でした。新型コロナウイルスが流行した時期だったので面会が禁止の中、会えたのは半年後の退院の日。祖父は半年前とは全く違った姿でした。車椅子に乗り、首と鼻にはたくさんチューブがつながれていて自然と涙が止まらなかつたです。半年前は元気に公園で遊んでくれたのに。たくさんしゃべってくれたのに。いろんな思いに涙が込み上がってきましたが「若いから生きて帰って来れたんだよ。」と医者の方が言っていました。

長期の入院をして手術も何度もしましたが、生命保険は保障を下げたところだったので給付金は頼りになりませんでした。数カ月後のことが分かっていたら、保障

第62回中学生作文コンクール

を下げていなかったのにと祖母は話していました。祖父の治療費やリハビリの費用のために祖母が働きながら介護をし四年が経った今、車椅子生活に変わりはありませんが、ゆっくり話せるようになり自分でできることも増えてきました。車椅子を押しながら散歩や買い物に行くのがぼくと祖父との楽しい時間です。将来の自分が何の病気になるのか、どんなケガをするのか、誰にも分かりませんが、もしもを想像することはできます。絶対死なない人なんていないし、病気やケガをする確率の方が高い。何より、お金があれば手術が受けられたのに、と後悔したくはありません。祖父のように生きていたら楽しいこともこれからたくさんあります。自分のこれからの「もしも」は自分で考え、万が一のためにやはり備えは必要であると思いました。